



二人の老



人

川崎ゆきお

公園のベンチに座り、数本咲いているしょぼそうな桜を見ている年配の男がいる。通りに面した広い歩道だ。

「小山田君か」と、座っている小山田に立花が声をかけた。似た年代と言うより、同級生だ。滅多に顔を合わさないのが、久しぶりのようだ。

「どうです。花見」

「ああ、ちょっと急いでるのでね」

「それはそれは」

「まあ、いいか」

「え、何がですか」

「一服しよう、灰皿もあるんで」

「そうでしょ、最近はこちらも歩行喫煙がうるさくてねえ」

小山田と立花は一人分隙間を空けて並んで座った。灰皿代わりにバケツを真ん中にして。

「仕事？」

「忙しくてねえ。しかし色々とおあるよ」

「そうだね、仕事をしていると、色々とおあるでしょうなあ」

「小山田君は、今は何も？」

「おかげさんで、何もしてないよ」

「それで、こんなところで、ぼんやりと」

「まあ、日課でね。こんなことをして、時間を潰しているようなものさ」

「少し厳しくなってきたねえ」

「え、何が」

「トラブってねえ。しかし、ここで踏ん張らないと、次の仕事に繋がらない」

「何の仕事？ 今やってるの」

「一寸した中継役だよ」

「中継」

「相手と相手を結びつける。信用第一でね。しかし信用なんて、一寸した誤解ですぐに壊れる。これを何とかしたいんだけど、打つ手がない。余計なことをすると、逆にまた誤解されるしねえ。最近胃が痛いよ。睡眠不足だし」

「それは大変だ」

「まあ、仕事が好きだしね。金も入るし、それに部屋でごろごろしてはいたって仕方がない。あ、失礼、君のことじゃないよ」

「まあ、部屋ではごろごろしていないけど、外でごろごろしているよ。さっきなんか暖かいので、眠りしそうになったよ。流石に横になるとあれだから、座ったまま耐えたけどね」

「しかし、胃が痛いよ。全人格を疑われているようなものだから、いたたまれない。誤解なんだけどなあ」

「何か手伝えること、ある」

「ない」

立花は煙草を吸い終え、そのまま立ち去った。

小山田は胃は痛くならないが、尻が痛くなりだし、さらに眠くなりだした。

了